

編集後記

編集長(ダン シロウ)

酷暑から逃れ、コロナ禍を避け、台風をすり抜けながら、今(9/8)までのところを過ごしています。皆さんはいかがお過ごしでしょうか？

対人援助学マガジンが第50号を迎えました。創刊時にこんなに続くとも、続かないとも思いませんでした。自分が飽きなければ、継続に無理のないシステムを構築してスタートしたので、結果的によくぞ13年もと思うだけです。

最近も、「読者から声をかけられて…」なんて喜びの声を執筆者から聞きました。私は「そうでしょう・・・」、と心の中で一人充たされた気分です。このようにセッティングしておけば、時間はかかりますが、そうなるに決まっていると思っているからです。

少し一般化してみると、多くの人が一生懸命なのに、なかなか報われません。入れ込みすぎて結果的に傷ついたり、二度とあんな無駄な労力を費やすことはしないなんて呟いていたりします。それを私は、確かなことばかり集めようとすぎた結果だったり、失敗する方法を選んで頑張っているのではないかと思っています。

何かを成功させたいなら、選択には注意を払うことです。その方法の一つが、正しいことではなく、役に立つことを始めることだと思います。言い換えると、客観的根拠に依存しすぎず、自己責任の主観でスタートしようということです。達成の可能性はどちらにしてもたかがしれています。ならば自分起点が一番ではないかと思うのです。

*

今号からも3人の新連載があります。50号を数えるのをきっかけにお声かけしてみました。執筆卒業の方、休載の方、復帰の方と様々です。長期連載中の「幼稚園の現場から」には、動画を組み込んだ新たな紙面が展開されています。

マガジンを読んでいただく機会のあった方達を、何らかの意味で応援できていたら、それに勝る喜びはないと思います。

編集員(チバ アキオ)

出身地である秋田の文学資料館で名誉館長と1時間ぐらいお話をする機会に恵まれた。何うと住井すゑや、雑誌『種蒔く人』を創刊した秋田生まれの小牧近江(こまきおうみ)の研究をされてきた方だった。「橋のない川」の話から始まり、私が関西に居る中で住井さんが出したテーマで感じていることがあるか?など様々な話題に広がった。

雑誌『種蒔く人』は反戦、半階級社会をテーマにプロレタリア文学を形成していく契機にもなったと理解している。同じく秋田出身で『蟹工船』著者、小林多喜二の獄中死に象徴されるよう厳しい弾圧も受けた。雑誌『種蒔く人』は発禁処分も4回、資金難もあり休止、再刊を繰り返しながらも、関東大震災時の人権侵害・迫害事件に抗議し、文字通り、様々な種を蒔く活動に終始した。その後の世界を私たちは今生きている。

対人援助学マガジン創刊以来編集長を務める団士郎先生は講演や紙面や作品を通じて「木を植えた男」という作品を紹介してくださった。1953年発表フランスの作家ジャン・ジオノの短編小説で、1987年にはフレデリック・バックの監督・脚本でアニメ化。アカデミー短編アニメ賞受賞他多数受賞している。先生のお話で私もこの作品がとても好きになった。

木を植えた男も、種を蒔く人も、未来を見ながら、そして今を見て、自分ができることをしている。50号となった対人援助学マガジンも、編集長の京都にある事務所で創刊号の編集会議から始まった。ここでは団編集長がいつも話してくださる言葉も私の頭によぎっていた。「しておくべきことをしておくこと」「あの時こうしておいたら…は成り立たない」という言葉である。そして、もう一つ。費用対効果のようなもの、「リターンのようなものを短い期間で求めすぎない」という言葉も繰り返し、説いてくださっていた。「やったら面白そうだからやる」「必ずこうなるはない」そんな中でのスタートだった。

未来に目を向けて、木を植え、種を蒔く、それを続ける。そんな活動は、身のまわりにはいくつもあるだろう。参加したり利用したりするのはもちろん、時には木を植える、種を蒔く側になるのもいい。そ

の一つ対人援助学マガジンは今のところ、発禁も弾圧も受けていない。できる時代にしておくこと、できるめぐり合わせでしておくこと、そんな価値も強く感じた名誉館長とのお話でした。

編集員(オオタニ タカシ)

対人援助学マガジンの記念すべき 50 号を、いつもと変わらない編集会議を経て発行できることを心から喜んでいきます。技術革新が速まった現代、流行りも廃りもあつという間にやってきます。そのような時代にあっても 10 年以上の間、同じスタイルで、しかし発展も遂げながら今日を迎えることができたのは、驚くべきことです。発刊時点での構想が的確であったのは事実でしょうが、とは言え、新たに執筆者に加わってくださった皆さんや、読書会・トークライブなどの新しい試みを面白がって参加して下さる方々もあって実現できている現在だと思えます。そう考えると、マガジンは執筆者だけではなく読者の方も含めて作られている場であるとも言えます。執筆者と読者とで、立場や権威に違いがあるわけでもなく、何かの既得権が生じているわけでもなく、ただ人が育っていくためのプラットフォームとしてマガジンが機能し、自身もその一部に関わっていることが嬉しいです。

コロナによる移動規制もなくなってきたので、また執筆者訪問記も再開したいですし、読書会やトークライブでお目にかかった人たちと直接お会いする機会も持ちたいなど、楽しみが膨らんでいます。

対人援助学マガジン

通巻50号

第13巻 第2号

2022年9月15日発行

<http://humanservices.jp/>

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

第51号は2022年12月15日

発刊の予定です。

原稿締切2022年11月25日!

執筆者募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

ページ制限なしの連載誌です。必要な回数も、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。 現在非会員で書いていただく事になった方には、本誌は学会ニュースレターの位置づけですので、[対人援助学会への入会](#)をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

表紙の言葉

夏が違ってしまったのは歳をとったせいだなあと思った。昔だって暑かった。でも、息子達とキャンプに行こうとか、四万十川をゴムボートで下ろうとか、当たり前だに思っていた。自分がそんな風に育ってきたからだろう。

この絵は不登校の子達を琵琶湖一周サイクリング（四泊五日）に連れだしていた頃のヒトコマ。キャンプファイアーを囲みながら、ダベったりカラオケしたりして夏を満喫していた彼ら。

それを見てると嬉しくなったのは、自分もそうだったし、わが子達もそうだったから、きっと彼らもというものだった。

病気ではないのだから何かを取り除くより、体力同様、これからの人生のステージを、より豊かにする体験を今積み重ねておいてやることだと思っていた。

団士郎 (2022/9/15)